

夢サラダ Vol.59

2016. 7. 1 発行

市民活動の拠点を目指しています。
「今治市民活動センター」
指定管理者：(特非)今治NPOサポートセンター
【お問合せ】TEL/FAX 0898-25-8234
E-mail imanpo@nifty.com

息の長い支援を熊本へ

熊本県で最大震度7の地震が発生してから3か月が経とうとしている。熊本県内の被災状況、被災者のニーズは刻一刻と変わる。地震の強度はもちろんのこと、続く余震への警戒は未だに解かれない。強い揺れと連続する余震がもたらした家屋の倒壊。見た目は住めそうな建物も、実施されている危険度判定では「危険」「要注意」と判定され、戸惑いが広がっていると聞く。

実際、頻発する余震に車中泊、軒下避難をしている人が多いのが特徴だ。仮設住宅建設の遅れもあり、避難所に身を寄せ続けている人も多く、住民一人ひとりの肉体的な疲労はもちろん、精神面にも癒しがたいダメージが膨らんでいるのではないかと感じる。被災地に広がるさまざまな困難。いま何が必要なのだろうか、私たちに何ができるのだろうか。長期化する避難生活に寄り添うこと、支援も長期的なものが求められそうだ。被災された方々に、愛媛・今治から心を寄せ、復旧・復興に向けた取り組みにそれぞれの立場で協力したいものだ。

災害ボランティアとは

20 年余り前の阪神・淡路大震災。現地には 137 万 7,300 人ものボランティアが集まったとされ、「ボランティア元年」と言われた。これを契機に社会に浸透した「災害ボランティア」という言葉。地震や水害、火山噴火などの災害発生時および発生後に、被災地において復旧活動や復興活動を行うボランティアを指す。

各地の被災現場で多彩な支援活動が大きな力を発揮してきており、ボランティア活動が果たす役割は被災地には欠かせないものの一つとなっている。

現地には災害ボランティアセンターが開設され、被災地の支援ニーズの把握・整理が進む。支援活動を希望する個人や団体を受け入れ、活動の調整が行われる。

5 年前の東日本大震災では、全国に約 200 ヶ所の災害ボランティアセンターが開設され、143 万人を超えるボランティアが活動したと報告されている（全国社会福祉協議会による報告書より）。

あの災害から学んだこと

平成 13 年、我が町を襲った芸予地震の際も、全国からボランティアが駆けつけてくれた。被害の規模は全体としてみれば大きくはなかったが、被災された人の恐怖や不安、傷に寄り添う支援の手は大規模災害の地と同じように必要不可欠であたたかかった。当時は、災害ボランティアセンターの運営マニュアル、ニーズと活動のマッチングの手法などが体系化されておらず、小さな現場で四苦八苦した。生かされたのは愛媛県外から駆けつけたボランティアの経験値。そして、日ごろ、今治市内で活動している団体のネットワークだった。他国と比べ自然災害が多い日本の中で、過去の災害から得た教訓を知識・技術として集積したいものだ。

平時のつながりを生かした取り組み

今治市では地域の防災力向上を目指し、防災士の育成に熱心だ。市民手づくりのイベント「今治防災フェスティバル」は、年に1度、小さな子どもから高齢者までが様々な視点から防災に関わる場として定着している。こうした学びの中で育まれた今治市民のつながりは、いつ来るか分からない災害への備えとなるだろう。そして何より、こうした土壌ある今治市で暮らす市民の中には、今、前の前で支援を求める熊本地震の現地へ足を運び、ボランティア活動に汗をしている有志がいる。こうした活動を通して、支え合うことの大切さ、災害に強いコミュニティを今一度考えたい。



▲毎年1月に開催されるフェスティバルでは、自然災害で犠牲になった方々を追悼し、手作りの紙灯籠約2,000個に火を灯す。

⇒ 中面「平成 28 年 熊本地震 みきやん応援隊
ボランティアバス」活動の様子

熊本地震災害ボランティア活動「チーム今治」活動レポート

～ 平成 28 年熊本地震 みきゃん応援隊ボランティアバス ～



■チーム今治の結成

5 年前の東日本大震災。

未曾有の被害の前に
「何かできることはない
か」と動いた仲間がいる。

たった一人で災害ボランティアとして現地に足を運ぶのは難しい。未経験者なら、なおさら勇気がある。そんな中、災害ボランティアを希望する市民有志を募り、一緒に現地へ出向く組織を結成した。それが「チーム今治」だ。宮城県女川町や気仙沼市などで活動を行ってきた。瓦礫の撤去や家屋の片づけなどの活動が収束する一方、コミュニティづくりや心のケアなどのニーズは拡大・多様化する。現地の復興への歩みを「忘れない」ことで寄り添いたい、そんな声を現地に足を運んだメンバーで語り合っていた矢先、熊本地震が起こった。代表の近藤健太郎さんの呼びかけで、市民有志が再び結集した。



●6月10日(金)出発式

この日、愛媛県障がい者福祉センターでは「みきゃん応援隊ボランティアバス出発式」が行われた。「ボランティアバス」は災害ボランティアがまとまって1台のバスに乗り込み、遠く離れた被災地に一緒に向かう手段だ。バスに必要な資材を積み込み、ニーズがある現地に直行。個人的に交通手段・宿泊方法を確保するのは情報が錯綜する中、難しいもの。またバラバラで現地に駆けつければ、活動を混乱させる可能性もある。市民有志が効率的に活動を展開でき、被災地にも負担が少ないしくみとして、多くの地域で運行されている。愛媛県では基金などを活用し、愛媛県社会福祉協議会が主体となって「ボランティアバス」を企画。このバスに乗り込み、「チーム今治」の10名の有志は熊本県益城町を目指した。

「できる限りの支援をしたい」と決意表明する近藤健太郎代表。この後、大勢の人に見送られ出発▶



▲今回は30歳～70歳代までの男性が参加。現地で一緒に汗を流した方々と集合写真。



●6月11日(土)避難所での活動

メンバーは2つの班に分かれ、避難所の支援を行った。近藤健太郎さんが訪れたのは、「益城町保健福祉センター」。今、約300人が身を寄せている。通路に敷いた段ボールに寝ころび、身体を休める方々を前に、声は全くかけられなかったという。地震発生直後は1,000人以上いたというから、その混乱は想像を絶する。掃除をしたり、支援物資を配ったり、黙々と働いた。熊本県が整備中の仮設住宅への引っ越しはまだまだ不透明。避難所生活は長期化が予想される。物理的に限られた空間だが、少しでも心地よく過ごせる「居住空間」にできればと感じたそう。物資は不足していないながら、食事は3食弁当。室内から出てゆっくり過ごす余裕は見られない。家族や近所の人同士があたたかい食事をとったり、ゆっくり話したりできる時間と空間づくりが課題だ。



◀避難所近くの町の様子。余震を恐れて、夜だけ避難してくる方が多いのも納得だ。

掃除から活動開始。感染症等への配慮からトイレ等は1日何度も掃除をする。▶



●6月12日(日)瓦礫の撤去作業

活動2日目は益城町のごみ一次仮置場での仕分け作業にあたった。生憎の雨の中だったが、全国から駆け付けた他のボランティアとも合流。40名余りで山のように積まれた家庭ごみなどを運搬、仕分けしていく。スレート壁材や瓦、コンクリートなどは倒壊した家屋の一部だろうか。大量にあるのは冷蔵庫、テレビ、洗濯機などの見慣れた家電類。ソファやスプリングマットなどもある。地震が起こる前までは、普通に家庭で使われていたもの。機械的に作業を進めるも、ふと気を緩めると感傷に襲われ、涙が頬を伝ったという。午後からは土砂降り雨となったが、作業の手を止めることはなかった。



ブルーシートが張られた建物。道路脇には家屋の一部や家財がまだまだ散乱している。でこぼこ道、そこに倒れたままの電信柱も目の当たりにした。撤去が進んでいないのだ。こうした光景を前に、まだまだ大勢のボランティアの手を集中させるべき段階だと感じたそうだ。参加した八木利征さんは「短い期間でも、大勢のボランティアが結集することへの期待は大きい」と語った。



◀うずたかく積まれた災害廃棄物。分別などは火災などの二次災害の防止にもなる。作業の重責を感じる。

全壊、半壊の建物はもちろん、倒壊の危険があり2階は全く手つかず家屋も。今度、益々遠隔地の自治体の協力の必要性を感じた。▶



参加者の声...

◆参加してよかった。
またこの仲間で現地を訪れたい。

- ◆支援は長期にわたる。
避難所への支援を手厚くしてほしいと感じた。
- ◆この経験を一人でも多くの人へ伝え、
将来の災害に備えたい。



活動現場へ向かう車窓から見えるのは、全壊・半壊した住宅。帰る家がないという不安ははかり知れない。そして、現地滞在の最終日には、4月19日以来の震度5弱を観測する地震が発生。頻繁に起こる余震を体感した。被災者が置かれている困難をひしひしと感じた瞬間だったろう。活動にあたったメンバーが感じたことに耳を傾けたい。そして、現地のためにできることを考えたい。



愛媛県社会福祉協議会では、7月以降も被災地の状況に応じて、**現地でボランティア活動を行う「みきゃん応援隊」**を実施する予定です。

「チーム今治」の被災地支援にご関心のある方は
お気軽にお問い合わせください。

「チーム今治」事務局 TEL:0898-34-8515

(今治 NPO サポートセンター内)



災害ボランティアには多大な期待が寄せられる一方で、活動が被災者や他のボランティアの迷惑にならないことが大切だ。一人ひとりが自分自身の行動と安全に責任を持つための基本事項を確認したい。



1. 災害ボランティア活動は、ボランティア本人の自発的な意思と責任により被災地での活動に参加・行動することが基本です。
2. まずは、自分自身で被災地の情報を収集し、現地に行くか、行かないかを判断することです。家族の理解も大切です。その際には、必ず現地に設置されている災害ボランティアセンターに事前に連絡し、ボランティア活動への参加方法や注意点について確認してください。災害ボランティアセンターの連絡先は、本会のホームページでもお知らせしています。
3. 被災地での活動は、危険がともなうことや重労働となる場合があります。安全や健康についてボランティアが自分自身で管理することであることを理解したうえで参加してください。体調が悪ければ、参加を中止することが肝心です。
4. 被災地で活動する際の宿所は、ボランティア自身が事前に被災地の状況を確認し、手配してください。水、食料、その他身の回りのものについてもボランティア自身が事前に用意し、携行のうえ被災地でのボランティア活動を開始してください。
5. 被災地に到着した後は、必ず災害ボランティアセンターを訪れ、ボランティア活動の登録を行ってください。
6. 被災地における緊急連絡先・連絡網を必ず確認するとともに、地理や気候等周辺環境を把握したうえで活動してください。
7. 被災地では、被災した方々の気持ちやプライバシーに十分配慮し、マナーある行動と言葉づかいでボランティア活動に参加してください。
8. 被災地では、必ず災害ボランティアセンターやボランティアコーディネーター等、現地受け入れ機関の指示に従って活動してください。単独行動はできるだけ避けてください。組織的に活動することで、より大きな力となることができます。
9. 自分にできる範囲の活動を行ってください。休憩を心がけましょう。無理な活動は、思わぬ事故につながり、かえって被災地の人々の負担となってしまいます。
10. 備えとして、ボランティア活動保険に加入しましょう。その際、極力出発地で加入手続きを行い、被災地に負担をかけないように配慮しましょう。

(全国社会福祉協議会 HP より引用)



平成28年度 市民が共におこすまちづくり事業

～個性的で魅力あるまちへ～ 補助団体が決定しました！



去る6月6日（月）、公開プレゼンテーション審査が行われました。

各団体とも、活動の目的や概要等を4分間でアピールし、審査員の熱心な質問に答えました。

選考の結果、6団体が採択決定！

身近なまちの課題に取り組む様々な活動に参加してみませんか？！

きっと新たな出会いや発見があなたを待っています。



森と田んぼと海をつなげる事業

今治西部丘陵公園を守り育む会

会長 富田 芳美

田畑・竹林・魚食等、季節ごとの体験授業を通して親子世代から広く周辺の自然環境を守り育むための意識づくりを目指す。



市民トリアージの研究と普及

市民トリアージ研究普及会

会長 田中 弘

大規模災害に備えて、女性視点や学校・自治会で実践的な防災対策を考え、自立した地域活動のため訓練・啓発をはかる。



フェリーで遠足

特定非営利活動法人今治シビックプライドセンター

代表理事 友田 康貴

フェリー乗船体験を通して遊び・学び、親子で今治の良さを話し合い、港やまちに対する誇りを養う機会を創出する。



今治まつり踊り活性化事業

海道よさこい祭実行委員会

代表 青野 誠司

よさこい踊りの活気を取り入れることにより、他県との交流促進、地元の祭りの活性化、地域の文化発展への関心を高める。



エメラルドナイト by キャロル・ウエルスマン

今治音楽愛好会

会長 黒田 周子

著名なジャズプレイヤーを招聘し、みなと交流館を活用して質の高い音楽イベントを開催。今治のまち・港の魅力を発信する。



ワークショップシリーズ 2016

今治ホホホ座

会長 石畑 由美

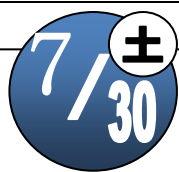
親子、障がいを持つ子どもも五感で自由に楽しめるワークショップを通じ、安心して暮らせるまちづくりにつなげる。

●市民が共におこすまちづくり事業●

市民自らが企画・実施する継続性のあるさまざまなまちづくり事業に、今治市が1団体1事業につき最大50万円を助成する事業（市民活動推進事業）です。他団体との協働により、それぞれの特性を活かしてより効果的に事業（協働推進事業）を行うスタイルも対象となります（最大100万円）。書類審査と公開プレゼンテーション審査を経て、事業の採択が決定されます。審査基準は、**公益性・自発性・団体の評価・費用対効果・事業の効果**の5つの項目から採点されます。



市民活動家として日夜活躍する市民審査員もあり、現場に即した質疑応答が行われました。今治市を魅力的で暮らしやすいまちにする市民目線の活動。継続的な展開につながる事業を応援したいですね。



NPO 現場体験ツアー 「ボランティアは初めて」 そんなあなたも安心して参加できる体験会です。

みなと交流センター “はーばりー” オープニングセレモニー

交流のみなとづくりを目指す“今治シビックプライドセンター”。“はーばりー”のオープンセレモニーでは周辺を菊間瓦燈籠で彩ります。作業ボランティアをしながらその思いを聞きましょう。

【時 間】15：00～19：30 【場 所】みなと交流センター（今治港） 【参加費】無 料

【対 象】まちづくり活動に興味がある方はどなたでも。（小学生以下は保護者同伴でお願いします。）

【問合せ】今治市民活動センター（指定管理者：今治 NPO サポートセンター）TEL. 0898-25-8234

